

INFORMATION

日本臨床試験学会 第14回学術集会総会 in 金沢 参加印象記 —広報の視点をまじえて—

京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構 (iACT) 戦略・広報室

ネフ由紀子

はじめに

2023年2月9～10日、石川県立音楽堂にて日本臨床試験学会第14回学術集会総会 in 金沢が開催された。本会の会長は村山敏典先生(金沢大学附属病院臨床開発部/先端医療開発センター)が務められ、テーマは“Clinical Trials in Beautiful Harmony”であった。コロナ禍第8波の最中であり、時折、みぞれの降る天気であったが、2日間で約1300名の研究者が参加し、会場は活気に満ちていた。筆者もここ数年はオンラインで学術集会に参加していたが、4年ぶりに現地で参加した。初日は感覚を取り戻すのに少し戸惑ったが午後には慣れた。本会は会長講演、特別講演1～3、シンポジウム1～12、チャットセッション1～2、総会、委員会報告、GCPエキスパートクラブ、優秀演題口頭発表1～2、一般演題(ポスター)135題、ランチョンセミナー1～4から構成されていた。本稿では参加した印象や気づいたことなどを広報の視点をまじえて記す。

発表について

筆者らは、大学病院の臨床研究支援機関(ARO)内で進めている戦略・広報活動について、アカデミア出展を1ブース、ポスターを2題、発表した[P-013「当院で実施中の臨床研究を国民に知ってもらうためには?—病院、ARO、患者さんをつなぐ戦略・広報活動」(2月9日、ネフ由紀子)、P-112「AROにおける戦略・広報室の活動について」(2月10日、堀松高博)]。アカデミック機関における広報活動は国内において遅れており、広報

職がどのような働きをしているか、あまり知られていない。研究者が学会の場や論文執筆において成果や知見を発表する方法とは異なり、広報は研究者の成果発表の内容や活動をより多くの人に理解してもらうために関連情報を広く知らせて啓発し、“情報を理解してくれる受け皿”を社会に創ろうとする行為になる。本領域にあてはめるならば、研究者や関連企業のみならず、国民・患者さんも臨床研究・治験についてより深く、正しく理解することができる土壌や文化を創ることが広報の目的であり、新しい薬剤や医療機器の創出には欠かすことができない活動である。

先述のP-112、P-013では広報の取り組み例を示した。京都大学医学部附属病院先端医療研究開発機構(iACT)では2021年7月1日に戦略・広報室を設けた。P-112では開室後の1年半の間、広報の対象の違い〔機構内、機構外(市民・患者さん、企業・研究者、学内)]を意識し、異なる手法で情報発信を展開したことについて発表した。病院内の臨床研究を活性化させるための戦略が広報活動に密接に結びついていることにも触れた。ポスター発表時間には、市民・患者さん向けにどのような広報活動を行っているかなどについて質問が寄せられた。ちょうど、向かいでP-128「チャリティーライブによる、小児・AYAがん及び臨床試験の啓発活動の有用性—Remember Girl's Power!! 2022—」(2月10日、可知健太先生)のご発表があった。6年間、毎年、ライブ活動を通して臨床試験に関する啓発活動を続けられ、市民の理解や参画の実績も積み上げられているすばらしい事例で

**Impressions from the 14th Annual Meeting of Japan Society of Clinical Trials and Research held in Kanazawa
—from a Public Relations Perspective**

Yukiko Neff: Strategy and Public Relations Office, Institute for Advancement of Clinical and Translational Science (iACT), Kyoto University Hospital

あった。市民向けの情報発信活動の成功例として学びをいただくことができた。

P-013では市民・患者さん向けの広報例として、検索システム「京大病院で実施中の臨床研究・治験」について発表した。相談窓口や診療の場で市民や患者さんから寄せられた質問などからヒントを得て検索項目を決め、システムを開発した。実施中の臨床研究・治験を市民・患者さんがいつでも検索できる (<https://iact.kuhp.kyoto-u.ac.jp/patient/result>)。研究支援に関わる担当部署から情報を集約し、公表可能な研究・治験のみを掲載し、毎月更新している。ポスター発表時間には、システム公開後の相談内容・件数や治験参加者数の変化、システム開発の方法などについて質問をいただき、有意義なディスカッションをすることができた。

9日、10日の両日ともポスター発表の場は盛会であり、出会いがあった。時間が過ぎても、多くの人が名残惜しい様子であった。

印象的であった演題

すべての演題を聴くことはかなわなかったが、9日(木)のシンポジウム7「Patients and Public Involvement～Beautiful Harmonyを目指して～」(オーガナイザー：川上貴裕先生，座長：寺元 剛先生，北村篤嗣先生)はとりわけ印象的であった。独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)，医薬品企業，アカデミア・実地診療，患者は立場が違うので，同じ patients を眺めていても見えているものが少しずつ異なる。それぞれの強みを活かしたPPI活性化への工夫は参考になった。Gatellier Laureline 先生は「患者目線で見た日本における近年の患

者・市民参画(Patients and Public Involvement: PPI)の動向」と題され，2022年「がん患者アンメットニーズ(患者目線の医療ニーズ)調査」の結果を紹介された。調査項目は，治療についての総合的な満足度，がん患者にとって必要な情報や情報源などについてであった。これらについて日欧で何が異なるかを比較し，根拠や理由を検討，課題解決の方法を探索される研究であった。

翌10日の会長講演では，大会長の村山敏典先生が「Clinical Trials in Beautiful Harmony」と題され，臨床研究の歩みや取り巻く社会の事柄についてご経験を取りまぜて講演された。先生が関わられた臨床研究の事例も紹介され，興味深く拝聴した。

おわりに

金沢では美味しい食べ物も多く，おでん，刺身，菓子などを堪能したことも良い思い出になった。

アカデミア出展やポスターの場でお目にかかった先生方からは，たくさんの気づきや教えをいただいた。久しぶりの現地での参加であったが，同じ場に立ち，悩みを共有したり，課題をディスカッションすることが改めて新鮮に感じられ，とても充実した2日間であった。このようなつながりがコミュニケーションの原点，ハーモニーではないだろうか。これをきっかけにして，臨床研究・治験の戦略・広報に引き続き励みたい。

アカデミア出展やポスターで紹介した戦略・広報活動は，戦略・広報室の誕生前から稲垣暢也先生(現 公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院)と企画会議を繰り返し，実行に至ったものである。稲垣先生のご指導に御礼を申し上げます。